

小説『ペンギン・ハイウェイ』

「アオヤマ君とハマモトさんの会話」の部分

ある日、ぼくがウチダ君といっしょに市立図書館で磁石の研究をしていると、ハマモトさんがいつの間にかとなりのソファに座っていた。ぼくらはしばらく磁石について話をした。

やがてハマモトさんが「アオヤマ君、〈海〉って何だったと思う？」と言った。たいへん思い切った、というふう感じた。ウチダ君がぼくのことをじっと見つめていた。

「ぼくは今でも考えている」

「仮説は立てた？」

「どうだろうか。ぼくは自分が立てた仮説が好きではないんだ」

「教えてくれない？」

「この研究はとても長い時間がかかる。まだまだこれからだと思う」

「そうなのね。わかった」

ハマモトさんはこくと頷うなずいた。

「アオヤマ君なら、きっとわかるだろうね」とウチダ君が言った。「ぼくはそう思うな」

平日には、ぼくは学校に通い、ハマモトさんとチェスをしたり、ウチダ君と遊んだりする。スズキ君がぼくらに意地悪をすることがなくなったのはうれしい。ぼくらはときどきスズキ君といっしょにゲームをすることさえあるのだ。休日になると、ぼくは図書館に出かけたり、ウチダ君やハマモトさんと街を探検する。相対性理論や生命の起源について議論する。

～この文書は、「生駒検定<全国版> <問22>小説『ペンギン・ハイウェイ』(下記URLをクリック)

に掲載されているものです。～

<http://ikomakentei.seesaa.net/article/446770147.html>